

子どもと出会う(1)

子どもにとつての保育室

岩田 純一

ときに子どもは、不可解な行動を見せることがある。それは今まで皆と一緒にいた子どもが急にカーテンのうしろや壁と本棚の狭い隙間、考えもつかない隅つこの隙間などに入つて、別に何をするでもなくただじつと身を潜めているといった行動のことである。しかも、それはどの年齢でも同じように出現

するわけではなく、一般的に三、四歳の頃にはよく見られるが、年長児にはあまり見られなくなる。ごっこ遊びやかくれんぼうならいざしらず、われわれにとつてはまことに奇妙な光景に映る。保育者であるなら一度は目にされたことがあるだろう。いつたい、なにゆえに子どもは隅つこの狭い隙間を好む

のであろうか。

それについてはいろいろな解釈も可能であろう。精神分析風には、それは子宮回帰願望の現われであり、子宮に似て狭く薄暗い場所が気分の落ち着きや安定をもたらすといった解釈がなされるかもしれない。また子どもにとつて隙間そのものが、そこに自分の身を滑り込ませられるかどうかを確かめると、いつた行動を引き起こす、いまや流行語の「アフォードする」という解釈がなされるかも知れない。しかし、ここではもっと違った発達的な観点から、子どもにとっての保育室の隙間がもつ意味について考えてみよう。

保育室という場所は、保育者のもとに子どもたちが一緒に活動するという、いわば公共の空間である。そこでは、じぶん勝手な振る舞いが制約され、じぶんだけの勝手な時間や空間をもつことは許されない。その意味では、子どもにとつての園は、じぶ

んの家のように自由にならない場として登場する。子どもが園生活に適応するためには、そのような場になじまなければならないのである。ところが、はじめて園にやつてきた子どもにとつては、まさにこのことが大きな課題となつてくるように思われる。その集団で、じぶんの思うがままをより強く抑えることが求められるお集まりの時間に見あたらず、探すと隙間に身を潜めている三歳児の姿は象徴的でもある。

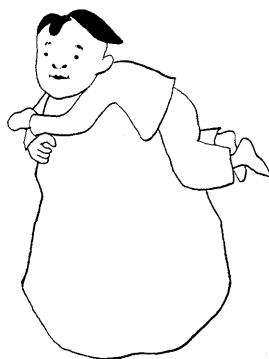
そのような子どもにとつて、部屋の隅っこにみつけた隙間は、まさに公空間から開放された、じぶんだけの私空間なのではなかろうか。

タテマエとホンネ

四歳の頃になると、しだいに皆と一緒にタテマエの公空間に身をなじませるようになつてくる。この頃は、意識の上でタテマエとホンネを区別して、じ

ぶんのホンネの部分を調整しながら、タテマエ（皆の約束事やきまり）にしたがつて振舞えるようになつてくる。しかし子どもによつては、まだタテマエにしたがつて振る舞ついても、タテマエの支配する場から身を退いて、ホンネ（自由なじぶん）になれる場所をみつけようとすることがみられる。それが、まさにタテマエ空間のなかに内なる私のホンネ空間としての隙間を作り出し、そこに身を潜ませるような行動となつて現れるようと思える。

しかしながら、年長になる頃には、タテマエが支配する公空間にうまく身をなじませながら活動できるようになる。保育室という公空間に覚悟をもつて、棲もうとするようになつてくるのである。したがつて、もはやそれまでのように狭い隙間に身を潜ませるといった行動はみられなくなる。もし子どもが隙間に身を潜ませているとすれば、それはごつこ遊びやかくれんぼといった遊びのなかである。



保育室というタテマエの公空間に身をなじませていく過程で、ホンネのじぶんになれる私空間が、まさに皆の目から逸れた隅つこの薄暗い隙間なのである。もちろん、年少や年中児であつても、すべてがこのような行動を示すわけではない。それまでとは異質な秩序化・管理された保育の場になじめない子、なじみにくい子どもが、その公空間のなかにあつて我がままになれる隙間を求め、そこに一時的に心身を潜ませるのである。

また、じぶんの心理的な不安や心配事を抱えているとき、この頃の子どもでは、皆の公空間から身を

潜ませるといったこともみられる。ここにあらずで、集団的な場に身をなじませるどころではなく、じぶん一人になれる私の隙間を求めるのである。ある女子大学生の述懐だが、年中児のとき、母親の長い入院で、その不安や淋しさもあって集団での活動どころではなく、皆から外れて暗い狭い隙間にじつとしていた思い出があるという。

このようにみると、部屋にできた隙間は、タテ馬工に合わさなければならない心理的な疲労や緊張からの一時的な逃げ場となつたり、不安なじぶんの心を癒したり、立て直す場となるのかもしれない。

『おしいれのぼうけん』

保育室のなかには子どもが身を潜ませるための隙間だけでなく、子どもにとつては非日常的な空間もある。そのような保育室の空間が子どもの育ちにとつてもつ意味を鮮やかに描き出した絵本がある。

それは『おしいれのぼうけん』（ふるたたるひ・たばたせいいちさく 童心社）という長く読み継がれてきた絵本である。すでにご存知の方も多いとは思うが、まず絵本の内容を要約して述べてみよう。

最初の出だしは、見開きのページで「ここはさくらほいくえんです。さくらほいくえんには、こわいものがふたつあります」といった意味深長なことばかりはじまり、日常の園生活の様子が描かれていく。ある日、さくら保育園のさとしとあきらは、午睡の時間にミニカーの貸し借りでもめ、すでに寝ようとして横になつているともこやかずおの足や手をふんづけてしまう。それを見て、みずの先生が怒り、二人を押し入れの上段と下段に入れてしまう。先生は二人が「ごめんなさい」と言うのを待つが、なかなか謝らないので、押し入れから出すに出せない。

そこから一人の冒險がはじまるのである。押し入れのなかは、夜の山と夜の海。二人が手にぎつて

いたミニカーとミニ機関車に乗つて街に向かつてい
く。二人が思わず手から離したミニカーや機関車
は、ひとりでトンネルに入つていく。それを追いか
けていくと、そこで（人形劇のなかで怖いと思つて

いた）ねずみばあさんがほんとうに現れ、お伴のね
ずみたちに食べられそうになる。それをやつと逃れ
てトンネルの出口へ走つてようやく外に出る。ところ
が、そこであなたねずみばあさんやねずみたちが待
ち構えており、さらに下水道へ逃げ、丸たん棒につ
かまつて流されていくが、結局はつかまつてしま
う。ねずみばあさんは「あやまるならたべもしない
し、このちかのせかいからもだしてやる」と言う。
二人は謝りそうになるが、「ぼくたち、わるくない
もん。ごめんなさいなんて、いうもんか！」と断
る。「ようし。それならおまえたちをわしのねずみ
にしてやろう」とねずみにされそうになり、ねずみ
たちがまさにとびかかるとしたとき、向こうから

ミニカーとデゴイチが光をつけて走つてくる。それ
に飛び乗つてふたりは逃げる。ねずみばあさんたち
は強いライトで「たすけてくれ！」と逃げ出してし
まう。

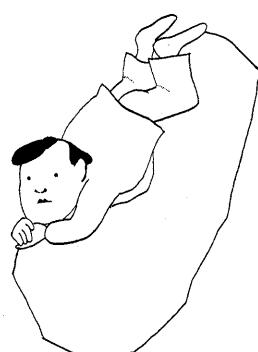
二人とも地下の世界から、空に浮かびあがつてい
く。気がつくと二人は押し入れのなかでデゴイチと
ミニカーをもつたままうどうとしていたのである。
汗ぐつしよりの二人は「あーくん。すごいぼうけん
だつたなあ」「へいきだよ、さとちやんとてをつな
いでいたからね」と、夢のなかの冒險が嘘ではな
かつたことを語り合う。気がつくと、なかなか二人
が「ごめんなさい」と言わないものだから、押し入
れから出す機会を逸してしまつた先生は、押し入れ
を開けて「ごめんなね、さとちゃんのいつたとおり、
おしいれのそとでかんがえてもらつたほうがよかつ
たな」と言う。みんなが「ね、ね。おしいれこわく
なかつた？」とよつてくる。さとしとあきらはあか

くなつて、とも」とかずおに頭をさげ、「さつきはふんじやつてごめんね」と素直に謝る。それから押し入れが恐い所ではなくなり、押し入れはみんなの遊び場所となる。最後の見開きページには「さくらほいくえんには、とてもたのしいものがふたつあります。ひとつはおいしいれで、もうひとつはねずみばあさんです」と括られている。

この絵本のテーマは、心の変化であり、見開きの変化が象徴的である。この絵本には作者のある思いが込められているように思える。さて、それは何であろうか。その思いは、絵本のなかの「ごめんなさい」ということばに込められているのではないか。じぶんたちは悪くないと思っているから「ごめんさい」が言えず、押し入れから出してもらえない。ねずみばあさんに食べられそうになつても頑として「ごめんなさい」を言わなかつた子どもが、二人で手をとり合つて逃れた夢の経験をくぐり、押し

入れの外（現実）に戻つたとき、今度は素直に「ごめんね」と謝ることができたのである。先生やねずみばあさんが、あれほど脅しても「ごめんなさい」と言わせられなかつたことばを、子どもはじぶんから「ごめんね」と言えるようになつたのである。じぶんたちは悪くない、しかし怖い押し入れから出るには謝らねばならないという心の葛藤が、このような夢をみさせることになつたのである。そして、夢という内界での冒險をくぐるなかで、「ごめんね」と言えるほど心が変化したのである。

さらにこの絵本でもう一つ興味を惹かれたところ



がある。それは押し入れから外を垣間見ると、いふ奇妙な感覚である。（あとで先生に塞がれてしまうが）押し入れの戸に穴があいており、そこから外の光がもれてくる。その穴から、片目をつぶつて見ると、今まで経験したことのないような奇妙な感覚が「ふふ、おもしろいね」と語られる。なぜであろうか。見慣れているはずの光景ではあるが、それを外から光景として見たことはなかつたからである。それは透明人間の視点である。じぶんは皆から見られないで、皆の世界をのぞき見るという奇妙な感覚体験である。のぞき見るという独特的の感覚体験である。

身を潜めるための隙間も、ときにはそのような感覚を体験させてくれる。ある五歳児が、仲間とのいざこざか何かでバツが悪くなり、身の置き場がなくなり部屋のスマックかけのうしろ（隙間）に身を隠していた。ところが降園の時間になり、その子どもが

見あたらないのがわかり皆で探しあてたが、見つけた子どもは先生に「おもしろかった、足音きこえて面白かつたわ」と言つたそうである。隙間から皆の足音をそつと盗み聞くことも、のぞき見ると同じように今までとは違つた奇妙な感覚を覚えさせたのである。今じぶんが不在となつた皆の場所を、皆が不在の「私だけの場所」から盗み見る、盗み聞くという奇妙な感覚体験である。まさに、子どもにとつては、「おしいれのぼうけん」は、新たな「知覚」の冒險をも可能にしたのである。

心の寄り道

『おしいれのぼうけん』では、押し入れのなかといふ私化された空間と、夢というきわめてプライベートな時間が重要な役割を果たしている。この絵本から、寄り道ということばを連想してしまう。一般的には子どもの寄り道はあまり奨励されないが、寄り

道にもそれなりの効用や意味をもつようと思われる。寄り道は、まさにプライベートな空間や時間を作ることである。じつは「寄る」の意義には、「縫れる」と「撰る」といった二つの正反対の意味が含まれているようである。前者は、文字通りに糸が縫れてしまう、こんがらがるといった意味であり、後者は縫れてもつれた糸を一本ずつ選び直すという意味である。したがって、「寄り道をする」には、縫れてもつれた糸を取り出してすつきりさせるという働きを示唆しているのではなかろうか。寄り道とは、感情のもつれや葛藤を、じぶんなりに整理したり、立て直したりすることができる空間や時間なのではなかろうか。そのように考えると、全国どこにでもある「寄り道」という名の酒場の由緒も納得される。サラリーマンが酒場に寄り道をして、その日にあつた会社でのうさを晴らして帰宅するのである。

その意味では、絵本の中の狭く真っ暗な押し入れは、子どもにとつてじぶんがじぶんの心（内界）に向き合い、縫れた心（葛藤）を解きほぐす「私」の空間や時間になったのである。それは夢という形で自律的な心の動きをもたらし、それがときとしてこのような心の変化をもたらすのである。二人が手をとりあって危機を乗り越えていくという夢をくぐるなかで、さとしとあきらはミニカーをめぐって縫れていたじぶんたちの気持ちを解きほぐし、「ごめんなさい」と言うことをめぐる葛藤を解きほぐしたのである。

押し入れ、それは光のない外部に閉じられた空間であり、その暗闇は一切の形を消失させてしまう。形のみえない世界、日常とは異なる混沌とした無定形の闇の世界である。光のもとに仕切られた秩序だった空間とは異質であり、そうであるからこそ、現実の秩序に制約されることなく、じぶんの内界へ

と導かれやすくなるのであろう。暗い押し入れがそのままのような「私の世界」への冒險を生み出したのである。闇の異界であるからこそ実際にはいないねずみばあさんが登場し、最後にはライトという秩序をもたらす光に照らされて消えてしまう。そして二人は現実（外）の世界へと戻つてくるのである。その意味では、子どもにとつて押し入れという非日常的な場所は、暗くて恐いけれども、心の寄り道を許す私の空間となつたのである。絵本の最後に、押し入れのなかで皆が楽しそうに遊んでいる絵が描かれている。この部分には少し不満が残る。それは、せつかくの心の寄り道ができる密かな場所、じぶんの闇の世界への密かな入り口を一つ失つてしまつたからである。

おわりに

今まで述べてきたことは、子どもにとつての保育

室に思いをめぐらせるとき、いろいろな示唆を与えてくれるようと思われる。たしかに整備され、効率的な保育室の環境が、子どもの活動にとつて重要なことは言うまでもなかろう。しかし秩序だって、四方が隅々まで照らし出されているだけではなく、他方ではじぶんの心を癒し、そつと立て直したり、じぶんの心の寄り道を許すような密かな場所を仕掛けとして保育室のなかにいかに作れるかということも大切なのはなかろうか。それは、保育室のなかのもう一つの必要な環境の設定であるように思われる。

（京都教育大学）